



## 居住空間デザイン研究室

Living Space Design, Art and Architecture Lab.

郡 裕美

KORI, Yumi / Professor



# Tangling — 路デ街ヲ編ム 神戸に兵庫津を着装ふ

Tangling-Knitting the city by streets: Be dressed in Kobe with Hyogo-tsu

神戸のファッションを分析して再定義し、街としての個性を、建築を介して提案する。

港町として一目置かれた神戸は、海外からの文化を取り入れ、国内の文化と融合することで独自の文化を発展させてきた。しかし、流通が急速にオープンになり、人・物・情報が首都である東京に多く集まるようになった今、神戸のアイデンティティが失われつつある。

現在の神戸は「人・物・情報」ではなく「意味」を取り入れることで、未来の都市文化を提示する必要があると考える。

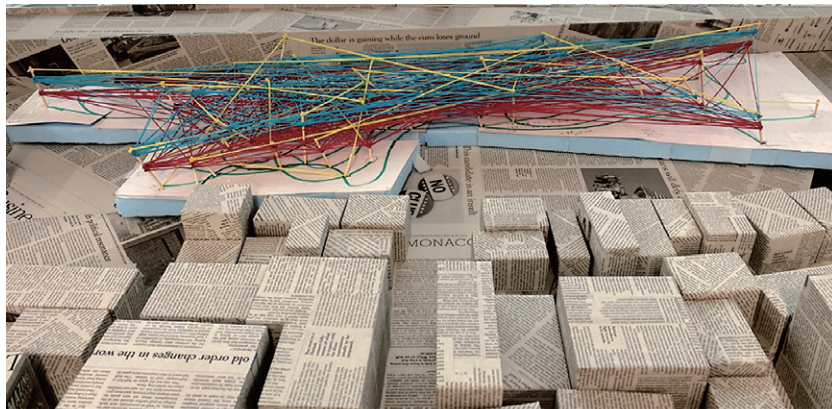
「質や意味の視点からの街づくり」

神戸ならではの、新しいものと異なるものとの出会い。全てがミックスな状態であるという神戸のファッションを建築で表現する。



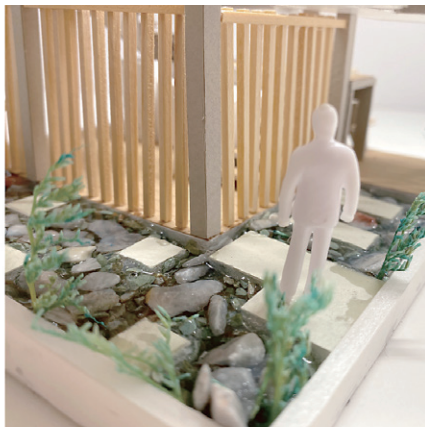
大西 知希

ONISHI, Tomoki



## びるどあっふ 未来を住む、健康を築く

buildup: Live in the future, build health



建築の進化は社会の変化に対応し、便利で快適な住まいを提供している。しかし、その進化は人が極端に動かないという便利害を招いている現状がある。更には在宅ワークやデスクワークが多くなっており、人々はあまり動かないことや座りっぱなしの生活が当たり前になってしまった。これらの運動不足の問題を解決したいと考え、住宅の構造を変化させて、住民が日常的に筋肉を動かす環境の設計や不利益を用いて、健康促進と運動不足の改善を促す住宅を提案する。

木戸 颯太郎

KIDO, Soutaro





# 洞窟でどうくつろぐ

Relaxing in the cave

現在の社会での生活は仕事による体への負担や、度重なる人間関係へのストレスなどから精神を病んでしまう人が数多く存在する。これは幅広い年代で起こり得る現象である。

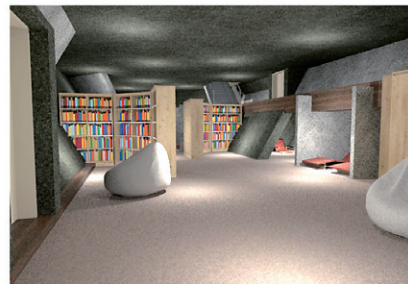
このような状況を改善するべく「時間を忘れた空間」を作成し、他人との関わりを最小限にし、普段の生活から離れた場所と体験で心身を一休みさせるリラクゼーション施設を提案する。

「富栖の里」という施設には日本で唯一の坑道ラドン浴があり、ここではラドンの効果で気管支から喘息やがん治療を行うことができる。しかし、ユーザー層が限定的なことや山奥にあることから唯一であるがあまり知名度がない。そこで新たに宿泊場所などをその施設の元である洞窟をテーマに設計し、自然と閉鎖された空間で非日常の休息を味わうことができる。



木山 翔

KIYAMA, Kakeru

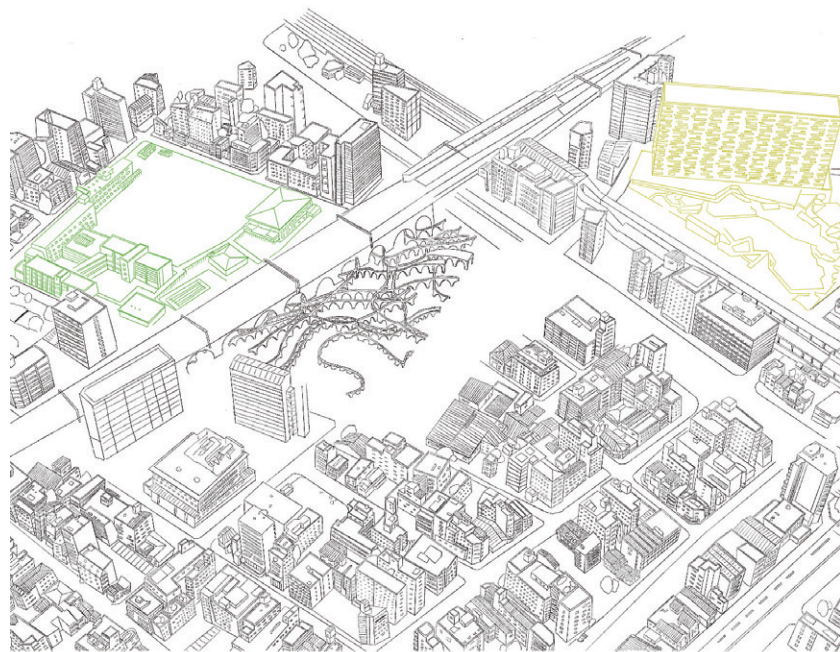


# 見えない壁の居場所 西成に新たな出会いの場を

Living in the invisible wall space: A new place to meet in Nishinari

西成は今現在、星野リゾートやホテルなどの建設が終わり、外国人観光客や定住する新たな人が増えている。しかし西成を訪れる人と、もともと住んでいる人とは見えない壁がある。その壁は過去西成で起きた出来事や、視覚的に感じる大きな二つの線路、言語の壁など様々である。

これらの壁があることで西成の魅力的な部分が新たに訪れる人たちに伝わらなくなってしまふ。なので様々な見えない壁を新たな出会いの場となり、自分で自由に居場所を見つくとどまれる居場所を提供する。



勢力 ケイト

SEIRIKI, Keito



# 消えゆく島の風景 侵食と堆積が創り出す新たな生業のカタチ

Evolving landscapes in the disappearing island: Erosion and sedimentation create new forms of livelihood

“生業とは島民だけが行うこと”という考え方自体間違っているのではないだろうか。

琵琶湖に浮かぶ唯一の有人島、沖島。そこに戦国時代から続く、生業があった。

かつては島民の約8割が漁業で生計を立て、多くの漁師が町を行き交い活気にあふれていた。しかし近年高齢化や人口減少により後継者が不足し、そのような風景が消えつつある。

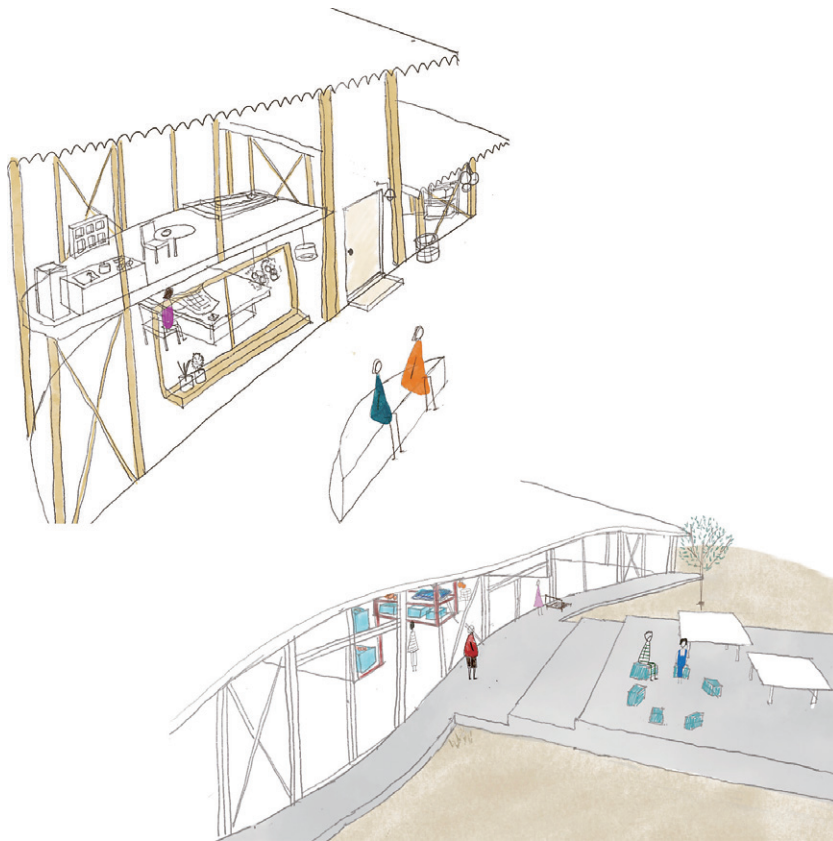
その風景を残していくために、生業と人の関係性を再考した。

島に訪れた人全員が少しずつ漁業の要素を摘み取り、行うことで長く続いていく生業となる。

その1つの要素として、漁具倉庫街がある。

そこは埋め立てられてできた場所で、周辺に建つ住宅は地形に呼応するように建っているのに対し、規則的に倉庫が並んでいる異質な風景。無機質とも言えるこの場所に、自然の温もりや暮らしが生業の要素と共に侵食することで新たなにぎわいと人の繋がりが堆積していく。

これは人の繋がりが生む、新たな生業のカタチ。



谷川 詩依

TANIKAWA, Shiyori



# 見えない水辺

Invisible water area



船による物流が宿場となり、小さな町が形成された。戦後、その川を暗渠に闇市として活躍するが、その後、3人の協力者によって三和市場へと発展した。

そして周辺は大きく拡大していく、商業の変革とともに市場は衰退していき、今ではシャッター街となり、昔の輝きを失った、寂寥な雰囲気づくう暗い場所へと変貌している。

尼崎で時代の流れと共に生まれた便利な暮らしの裏で、都市化がもたらす負のインフラに新たな流れを与えることを模索しました。戦争で暗渠に変わった川は、都市化によって負の側面を抱えている。

存在を知らない人々も感じることができ、見えない川が水を運ぶ、人々と共に循環し、継続的な再生を成し遂げる美しいビオトープを築きたいと考えた。



濱田 良平

HAMADA, Ryohei

## ツキヨミ 時の街明石で魅せる

Viewing moon: Fascination in Akashi, the city of time

江戸時代。西国の要衝だった明石城。  
ヒトビトは、あらゆる瞬間に発生する戦いに備え、  
この城の櫓にて物見していた。  
日が姿を消し、闇に包まれた周囲を警戒する  
若干の張りつめた心。  
その心を温め、癒すため…。  
東の闇より、激しく美しい光が姿を現していた。  
それは…「月の灯り」。

現代社会において、ヒトビトは人工の光を  
四六時中浴びている。いつでも、どこでも、縦横に照ら  
された明るすぎるかもしれない世界が眼前に広がる。

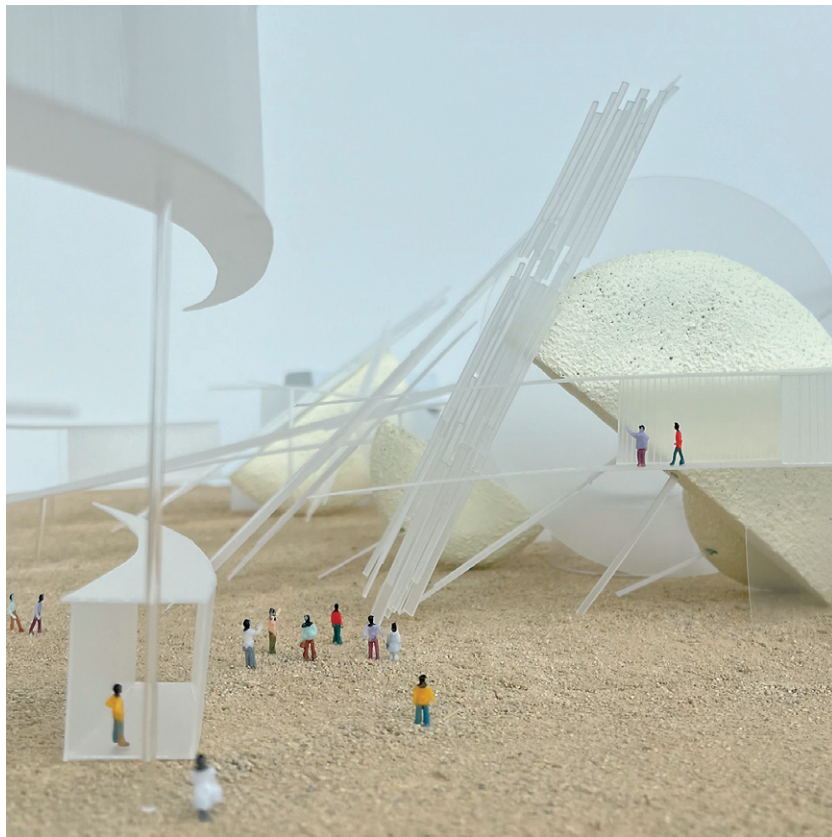
トキに、その光に夢中になり、  
当たり前にある美しさに気づけないでいる。

45億年前から私たちの地球と共にある「月」。  
その様は、日々、刻々と移り変わり、  
かけがえのないトキを私たちに伝える。江戸時代のヒト  
ビトはその美しさを感じ、愛でていた。

そして今、私は、そのトキしかない月を「トキの街、明石」  
で愛でていたい。



森分 美結  
MORIWAKE, Miyu





## 織りひろぐ五重奏 小倉の音と共に紡ぐ織物の伝え方

Spreading and weaving quintetto: Weaving the town's melodies and passing on the memories of Kokura textiles



福岡県北九州市小倉。ここにはある1つの工芸品「小倉織」がある。江戸時代、小倉一帯は機織りの音で溢れ、全国へと伝わり、人々が身につけることで織物は身近で美しかった。しかし、まちの人にとって1番身近なものが消え、織物という工芸品が人々から遠のいてしまっている今。私が思う織物の伝え方とは――。

それは、音が止まっているとも言える場所に、まちの音である太鼓の音・機織りの音・紫川のせせらぎの音・まちの人の日常の音

これらの音と世界共通ともいえるクラシックの滑らかな音を編み込み、織物と音を融合させることである。身につけられる機会が少なくなったことで織物の動きを目にすることがない。しかし、クラシックの音・このまちの音と共に紡ぐことで新たな動きが生まれ、再び織物はここから広がっていくのではないだろうか。



吉本 佑理  
YOSHIMOTO, Yuri